



TITLE:

山本先生を憶ふ

AUTHOR(S):

本庄, 榮治郎

CITATION:

本庄, 榮治郎. 山本先生を憶ふ. 經濟論叢 1941, 52(6): 742-744

ISSUE DATE:

1941-05

URL:

<https://doi.org/10.14989/131551>

RIGHT:

東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第五十二卷 第六號

昭和十六年六月

哀辭 故山本博士遺影及署名

論叢

支那の農家と田賦附加税……………經濟學博士 八木芳之助

佛印幣制論……………經濟學博士 松岡孝兒

企業者勞働費論……………經濟學士 大塚一朗

貨幣流通期間と平均生産期間……………經濟學士 青山秀夫

時論

重慶政府の戰時物價政策……………十龜盛次

記事

山本博士逝く

追憶文

神戸 正雄 末廣 重雄 牧野 虎次 中瀬古六郎 本庄榮治郎

谷口 吉彦 松岡 孝兒 大塚 一朗 堀江 保藏 穂積 文雄

高木 眞助 蟻川 虎三 石川 興二 金持 一郎 岡本 清造

附錄

彙報

外國雜誌論題

本誌第五十二卷總目錄

元氣なやゝ病高い聲が室外の廊下に洩れ聞えたものであつた。

◇専門の關係からとも考へられるが、先生は支那へ旅行されたこと前後五回、南洋占領地へは大正四年に出張され、大正九年には南北樺太及露領沿海洲を視察され、昭和五年には再度の歐米旅行を試みられた。支那旅行の際にも風土病に罹られたやうに聞いたが、二度目の洋行の際は病氣を押して旅行を續け、學年始の講義に間に合ふやうシベリア線經由で無理を重ねられたため、病氣が重くなつたやうに思はれる。これより前大正十四年の春と思ふが、學部長として任期満了前にも感冒で入院加療されてをり、この頃から多少健康を害されてゐた。それが二度目の洋行のときにも影響してゐたことであらうし、その後は健康は勝れなかつた。昭和七年に再び學部長の職につかれたが、我々は健康上激職に就かれることを氣遣つてゐたのであつたが、幸に大した差障りもなかつたやうであつた。時恰も法學部問題が起り、先生は言葉通り寢食を忘れて學部の

山本先生を憶ふ

本庄 榮治 郎

◇山本先生が本學に來任されたのは、私が第四學年に在學するときであつた。その時は特別講義として低學年に勞賃論の講義をされてゐた。京都法學會雜誌に載せられた「ヘルマンの賃銀説に關する研究」(明治四十四年)「チューネンの賃銀説に關する研究」(大正元年)はこれに關係あるものと思ふ。植民政策の講義をされたのはその次學年度からであらう。水産經濟については別に講義題目とはなつてゐなかつたが、神戸博士主宰の經濟全書の一冊に「水産經濟」を執筆された(大正二年)私は先生の講義を聴く機會を持たなかつたが、當時は

ために盡され、自分の健康などは問題とせず、萬全の策を樹てゝこれに邁進された。

◇その當時のことを考へると、實に傍から見ても、お氣の毒な感じがした。私もその時評議員の席末を汚してゐたので、山本部長と色々相談する機会が多かつたのであるが、先生は來訪者や用事のため三時頃までも中食をせずにをられたことがあり、又不穩な言辭を弄する者があり、傍から聽いてゐてハラ／＼することもあつたが、先生はこれ等の者に對して全く慈父の態度を以て諄々として説き、相手を納得せしめずば止まぬ熱烈さであつた。經濟學部の學生を一堂に集めて輕舉妄動せず、學部の方針に従つて行動するやう聲淚共に下る訓戒を垂れられたこともあつた。後にある方面から述懐談を聞いたが、學生は『山本先生には叶はぬ。まるで親爺に説教されてゐるやうで、自然に頭が下つて文句のいひ様がない』と述べてゐたといふことである。これは全く先生の至誠の賜であつたと思ふ。

◇大學院在學中、私はさゝやかな研究や調査を御日に

かけたことがあつたが、先生は必ず之を讀んで激勵の言葉をかけられた。後進者の指導誘掖には溫い心を以て當られたことがわかる。

◇先生はすべてのことに全力を挙げられる。獅子は兎を打つに全力を以てすといふが、全くその通りで、些細な事柄でも、いゝ加減に片付けて仕舞ふことをせず、全力を盡して事に當られる。自己の意見を主張される場合にも、それ程までに言はなくともよいと思はれる程、強く主張されることもあつた。左翼思想華かなりし頃、先生は毅然として反對の意見を述べられたものである。

◇先生はまた極めて眞面目である。すべてが几帳面であつた。例へば食後三十分で服藥すべき場合には必ず三十分経つたときに藥を持つて行かなければならぬ。それが五分も遅れたり早かつたりすると小言をいはれたといふことを聞いてゐる。萬事がこの通りであつた。

◇この慈父であり嚴父であり、而も正しき道を一筋に

追憶文

暮らに駆けて行かれた先生は、今や地上の生活を了へて天上の永遠の生活へ移られた。田島先生も六十八歳で他界されたが、直接にその流を汲まれた山本先生も同じく六十八で昇天された。奇しき因縁とでもいふべきであらう。兩先生とも天上から我々を守り導いて下さつてゐることであらう。先生の御冥福を祈つて追憶の筆を措く。